

うえすとさいど

地域交流イベント「バリアフリーな街ふせ」 高校生の開幕パフォーマンスや模擬店でにぎわう

2月11日、「バリアフリーな街ふせ」が布施駅前商店街の「クレアホール布施」で開かれました。今回は初参加もふくめて多くの事業所、地域のグループさんが多彩な店舗を開設、歌って踊る賑やかなパフォーマンスをくり広げました。会場には150人を超える人たちが集まり、模擬店での飲食やショッピング、ステージを楽しんでいただきました。

2つの初参加をふくめ6事業所が多彩なショップを開設

「ふせ支援ネットワーク」の事業所職員やその家族の小学生、学生ボランティア、飛び入りで加わった「ふせまちかど相談所」の利用者のNさんらの協力で準備は完了。間もなく、お店を開設する事業所さんが、いろんな機材や販売品を運び込んできました。今回は6つの事業所さんにご協力をいただきました。

初めて参加された就労継続支援B型事業所「はっぴいアイリス」さんは、ふわふわのシフォンケーキ、クッキーなどを机に並べます。とても評判がよくて、毎月2回ほど「ふせまちかど相談所」の近くでも販売していますが、いつも早々と完売しています。

同じく就労継続支援B型事業所の「布施若草園」さんは毎回、パウンドケーキを販売されていて種類も豊富。当事業所の職員の子どもたちも大ファンで、毎回「買ってきてね」と頼まれるそうです。髪を束ねるファッショングムやマグネット付きのクリップなども、手作りのかわいい一品です。

さわり織のぬいぐるみを並べるのは生活介護事業所「蓮」さん。カラフルでかわいらしく、子どもたちは目を輝かせてお気に入りを選んでいました。

同じ法人の「蓮II」さんの店頭には、手作りパンや焼き菓



⑤革製の花をアレンジしてキーチェーンづくりを楽しむ女の子と願いごとを書いてもらう「つどいの樹」コーナー

子、そして羊毛フェルトの雑貨が並びます。パンは種類も多く、どれにしようか迷います。ここでパンを焼いているのは「ふせまちかど相談所」の利用者さんです。

おもちゃや洋服、ぬいぐるみなど山のように積んでいるのは、就労継続支援B型事業所「なないろほ～む」さん。毎回、お買い得商品を集めたバザーを開いています。そのほか、恒例のワッフルも人気です。

大勢の子どもたちが熱心になにやら作っているコーナーも。初めて参加された幼稚教室「リトルアリス」さんのワークショップです。きれいな皮製の花の山から、お好きな2つを選んでオリジナルなキーチェーンをつくります。組み合わせは多種類に上るので、一人で10個も作ったひとも。

寒い冬には、甘くてあったかいぜんざいがあります。こちらは毎回、「東大阪店舗管理センター」さんが無料で提供していただいています。



11時になりオープニングセレモニーがスタートしました。最初に大阪府立みどり清朋高等学校「地域貢献部」による「中河内戦隊セイホウジャー」の登場です。

怪人ハーマンが歯磨きをしない仲間を連れ去ろうとしたとき、セイホウレッドが助けに駆けつけハーマンを撃退。安心をしたのもつかの間、今度は別の怪人が分別されていないゴミの詰まった籠を担いで登場。セイホウレッドが「ゴミは分別して出しましょう」と呼びかけ、会場のみなさんの力も借りて籠の中のごみをしっかりと分別できました。「中河内戦隊セイホウジャー」は高齢者施設や児童の通所施設などでもショーをしたり体操をしたりするボランティアをされています。

(4面に続く)





【第7回】 しげの つとむ
重野 勉さん (67)
(社会福祉法人「ポポロの会」理事長)

「前川（敦）さんが『ふせ支援ネットワーク』を始めた時は無謀や、と思いました。東大阪での長い活動の中で、地域の課題を理解し、それを解決したいーとの思いはわかるけど、資金はどうするの？とかね。しかし、後から計画相談という事業がついてきた。地域での信頼に培われた豊かなネットワークの力ですね」。そう話す重野さんも「ポポロの会」（八尾市）理事長として、知的障害児者の「就労支援」「生活介護」「児童発達支援」「グループホーム」などをユニークな手法で展開しています。

■グループワークを通して「福祉の面白さ」に出会う

重野さんが福祉の道を志したのは、大学生時代にボランティアをした身体障害児の療育施設「大手前整肢学園」での経験がきっかけでした。

「打ち込んでいたサッカーもケガで挫折。練習三昧で学業も遅れを取っていた。追い付くには机上の勉強より（福祉の）実践しかないと、整肢学園での実習に飛び込んだ。

そこでは脳性まひや骨形成不全…といった障害を抱えた幼児から中学生までの子どもたちが、先進的な治療やリハビリを受けていました。「治療用の装具をつけた子どもたちは、家庭ではそれらを管理できないので、施設で暮らし土日に家に帰る。こどもらしい遊びもできず、設定された就寝時間もびっくりするほど早い」

こうした「医学モデル中心」に異議を唱え、こどもの心のケアなど「生活モデル」を広げていく改善運動を展開していたのが、当時福祉職として在勤していた新崎国広さん（元大阪教育大教授）らの若手職員でした。

どうやれば子どもたちが快適に暮らせる空間をつくれるかーその一つが新崎さんの指導する「グループワーク」という手法でした。

子どもたちがみんなで何をするかを決め、最後に発表会をする。重野さんは当時ギターを弾いていたので、それに



合わせてみんなで歌うプランを提案。子どもたちも賛成して、じゃあ曲はこれ、振り付けはこう…と進めて行きます。

ところが、一緒にできない子もいた。女の子のスカートのすそを引っ張ったり、奇声を発したり…と邪魔をする。重野さんは「あの子は排除されるかも」と案じていたら、中心になって動いていた女の子がみんなの意見をまとめあげた。「しゃあないやん。気にせんとやろう。あの子もここにおってくれるだけでええやん」と。子ども同士がぶつかりあいながらも物事を決めて前に進め、みんなでゴールを目指すまさにグループワークでした。

迎えた発表当日。「やったんですよ、その子。みんなに合わせて上手に体を動かす。練習をちゃんと見てたんですね。子どもたちの力、すごいよ。いい経験をさせてもらいました。あれがなかったら今ごろここには居なかつたなあ」

■続いたイバラの道

卒業後、迷わず進んだ福祉事業の道には数々の落とし穴が待ち受けていた。一族経営の施設では理想には程遠い経営。「働きがい」のある障害者の作業所をみつけたものの、その給料では家族を養えない。精神病院に勤務すると、患者を集めることに努力を傾ける経営陣。

それに抗って「退院-地域での生活」を追求した重野さんに悲劇が襲いました。退院支援で自分が地域に送り出した患者の一人が、地域になじめず自死、大きな無力感に襲われた重野さんでしたが、「退院をしたい」という患者さんたちのため「これではいけない」と当時一緒に仕事をしていた人と、ナイトケアハウスを立ち上げました。募金を募り、空き部屋を借りて地域で暮らす退院後の患者さんたちと一緒に夕食を作って食べる—地域の病院の医師やワーカーの協力もあって実現をしました。そして今では法人格をとり続いているそうです。

さらに、スキルを磨くために40歳の時に大学院へ。その後、福祉の専門学校や大学で人材教育に身を置きました。そんな時「それが、あんたのやりたいことか？」—そう言って当時「ポポロの会」の理事長をしていた方が、重野さんを福祉の現場へ再び引き戻したのです。

■ランチはホテルの味

「ポポロの会」では次々に事業を立ち上げましたが、中でも「グループホーム」は、住宅メーカーと提携したユニークな「建て貸し」方式。地主さんに家を建ててもらい家賃を支払ってホームの部屋を借りる。自前で建てる1億円以上かかる費用が1000万円以下の初期投資ですんだそうです。この方式で将来は高齢の障害者のホームなども視野に入れています。

そして利用者への質の高い支援とともに目指しているのは、自分の過去の経験から「この法人で仕事していてよかった」と誇りに思ってもらえる環境づくり。職員の給与の水準を上げることを第一とし、結婚後も安心して仕事に専念できるようにと、「企業内託児所」も設置した。「理事長になったとき、大きな机も高い給与もいらない、生活できればそれでいい」と改革をしました。

そしてご自慢は、何と言ってもお昼ご飯。初代の料理長はフレンチのシェフ、2代目は大手和食レストラン出身の料理人さん。インタビュー後、「用意してからぜひ食べて行って」と案内されたのは明るくてとてもきれいなレストラン。メニューは和風ラーメン、メンマ、白菜とちくわのポン酢和え物、フルーツソースのかかった杏仁豆腐。感動のおいしさでした！（川本光璃）

こんな時代だからこそ！ 共にメリットがある
おつきあいをご提案♪
昭和印刷出版株式会社

〒577-0058 東大阪市足代北1-18-9
TEL: 06-6785-1080 FAX: 06-6785-1081
E-mail: showa2@smile.ocn.ne.jp <http://www.shouwaprint.com/>

千頭 雄介さん (ちかみ ゆうすけ)

重度の知的障害 半年前から地域で一人暮らし
実現にこぎつけた支援の輪



今回ご紹介する「ふせまちかど相談所」の利用者さんは、千頭雄介さん（43）です。千頭さんは、東大阪市で生まれ育ちました。重度の知的障害のため、会話をするのは難しく、思いを伝えるときには、声やジェスチャーで表現します。入所施設で生活をしながら、地域で生活する訓練に取り組み、半年前東大阪市内でヘルパーさんのサポートを利用して一人暮らしを始めました。千頭さんが入所施設から東大阪市にもどってくるまでの取り組みは、次号の『うえすとさいど』でご紹介する予定です。今回は、地域生活をはじめてからの千頭さんの変化を、通所先のクリエイティブハウス「パンジー」（以下「パンジー」）の管理者、北田徹さん（43）に紹介していただきました。

「パンジー」は、社会福祉法人「創思苑」（東大阪市中新開2丁目、林 淑美理事長）が運営する生活介護事業所の一つです。「創思苑」は利用者の生の声をインターネットを利用して発信する「パンジーメディア」などユニークな活動を行っています（うえすとさいど第33号）。北田さんは、同法人の施設で14年前から障害者の支援業務を行っています。（西田奈津子）

【パンジー管理者、北田徹さんの話】

千頭さんと出会ったのは7年前です。入所をされていた施設からの相談があり、面談に行きました。でも当時はまだ地域移行を受け入れる体制が整っていませんでした。2年前に再会した時にはずいぶん落ち着いて来歩いて、地域生活の再開に協力、2023年の9月から地域での一人暮らし始まりました。「パンジー」に来てからはまだ半年ほどですが、ずいぶん精神的にもゆとりができるようになりました。

入所施設にいた時は、大きい声を出して、「あれが欲しい、これが欲しい」と要求がすごく続いていたそうです。また、なぜか椅子に座れず、座ってもじっとしていることができず、床にべちゃっと座りこんでしまうことも多かったとか。

食への執着が強かったため「一つ一つの行動の区切りにお菓子を食べる」という過ごし方をしていたようです。例えば部屋を移動するなど、行動を起こす前にはお菓子を食べるということをしていたので1日に何度もお菓子を食べていたと聞きました。

一人暮らしをスタートした当初も、朝の準備時間にコーヒーの要求が頻繁にあり5杯くらい飲むこともあります。



北田徹さん



支援する施設職員の手に触れて
あいさつを交わす千頭さん

した。

朝食を食べたらパンジーへ行くための送迎車がくる場所まで歩いていきます。午前と午後にそれぞれ作業の時間があります。作業は「しなくてはいけないこと」になると楽しくないので、千頭さんの近くで職員が「これ手伝ってもらえた助かるな～」と独り言のように言ながらうろうろする。気分が乗っているときは自分から手伝ってくれます。そうでもないときはすっと離れていくんです。こちらが指示をするのではなく、千頭さんのやる気を引き出し、一緒に取り組むプロセスを大切にしたいと思っています。

作業が終わると送迎車で自宅近くのバス停まで帰ります。帰宅後はヘルパーが食事を作っているのをチラっと見て、ベッドで横になって休憩します。最初のころは食事ができるまで大きな声をだすこともありました。今ではヘルパーとの信頼関係もでき

「待っていれば大丈夫」と
感じるようになったこと
で待つことができる
ようになりました。



「笑って！」の声かけにこんなに
素敵な表情をしてくれました。

かつては人とのコミュニケーションは「お菓子が欲しい」など何かを欲求することがほとんどでしたが、最近は「人を呼びたい」ときや「自分がここにいる」とか「ここでこれをしているよ」とかを伝えたいなど、精神的なつながりを求める場面が増えてきました。一緒にお出かけした職員に後日、笑顔で近づいてきて肩をトントンと叩くことも。「この前楽しかったね、また行こうね」と声をかけると満足をしたようになっていた。きっと「一緒に出かけて楽しかった」と伝えたかったのだと思います。

この前は一緒にいたラーメン屋さんで「あはははは～」と笑いながら食べてました。まるで「こんなおいしいもの初めて食べた！」というように。そういう表情を見せてくれるようになったということが一番うれしかったですね。

ふせ支援ネットワーク賛助会員

東大阪店舗管理センター
カットハウスAmi
昭和印刷出版株式会社

Craftbeer Tavern
一般社団法人アミュー

フランメンコやスイーツ…お腹も心も豊かに



写真上段 = (左から) みどり清朋高生徒の「中河内戦隊セイホウジャー」／「蓮II」さんのパン／「なないろほーむ」さんのバザー

写真中段 = (左から) アルシュさんのフラメンコ劇／フラメンコと

壮良さんの太鼓のコラボ／「まちかどマイウェイ」展示作品／

写真下段 = (左から) 「東大阪店舗管理センター」さんのぜんざい／「若草園」のファッショング小物／「蓮」さんのさをり雑貨

(1面より続く)

地域で活動する福祉事業所やグループ、サークルが集まって交流する「バリアフリーな街ふせ」

(2月11日、布施駅前商店街「クレアホール」で開催)は午後に入ってステージが一段とにぎやかになりました。

フランメンコサークル「アルシュ」さんは今回初参加。ダンスを指導しているイワイヨシコ先生は放課後等デイサービスや障害のある方の通所施設で音楽療法もされていて「ふせまちかど相談所」の利用者、中村壮良さんが利用するデイサービスでも太鼓の指導をされています。それが縁で壮良さんもチームとコラボ参加することになりました。

今春高校を卒業したS君は、小学校3年生のときからふせまちかど相談所を利用しています。恥ずかしがり屋さんで挨拶するのも苦手でしたが、中学生になったころからぐんと成長。先ごろは高校卒業後に通う福祉事業所の実習で、自己紹介やその日の感想などもしっかりと話が



⑤「そだちの家まちかど」の子どもたちが、これまでの活動で制作した凧や段ボール製の銃など作品集

できたそうです。

今回のコラボでは、S君の力強い太鼓のに合わせて「アルシュ」の方が「無法松の一生」を歌い、法被姿の踊り手が素敵な演技を披露し喝采を浴びました。続いて華やかな衣装に着替えて再登場。ラインダンスやアクロバティックな踊りが繰り広げられ、最後はビゼーのオペラ「カルメン」をアレンジしたフランメンコダンスで魅了。大きな拍手に包まれてステージは終了しました。

能登半島地震の義援金 9013円が集まりました

なお会場で「能登半島地震の募金」を呼びかけ、9013円の寄付が集まりました。また今回の開催にあたって中尾鈴美さんからはご寄付をいただきました。厚く御礼を申し上げます。